

はしがき

私たちは何かがきっかけになって、自己の位置づけや集団のありようの変化を感じたり、人生や社会の見方が変わったりする。自明と思っていたものが自明でなくなった時、深層の変化に気づいた時、驚きは大きくなる。

変化に流される、任せる、乗る、抵抗する、いずれにせよ、私たちは内と外の変化を生きなければならない。変化に応じる過程で、新しい発想、行動様式、共同性を生み出すことがある。私たちは変化を生きながら変化を創っている。

はるか昔から、社会のある変化を感じ取って、その変化が何に起因し、どのような意味をもち、何をもたらし、どう対処すべきかを考える人がいた。為政者、宗教者、知識人のみならず市井の人々も、それぞれの流儀で変化について思いを巡らせた。変化について考えることも、変化を生きることに他ならない。

近代になっても、変化の原因、意味、行方、対応の仕方を考える営みは続けられた。時代を19世紀以降に限定すれば、社会の変化を説明しようとした主な理論としては、唯物史観、M. ヴェーバーの変動論、近代化論、世界システム論、グローバル化論がある。

それぞれの変動論を略説しよう。まず、K. マルクスは労働者階級の貧困からの解放を目指して、イギリス資本主義の成立史を研究し、生産様式のあり方とそこから生まれる階級闘争を、歴史の決定要因とみなす唯物史観を提唱した。

これに対し、ヴェーバーは直接的には経済的観念的利害関心が人間の行為を支配するが、それを方向づけるのは、宗教的救済の理念によって創造された世界像であると主張した。なぜ西洋でのみ近代資本主義が成立したかを考察するために、彼は儒教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の特徴、その経済倫理と担い手、各宗教が生まれた地域の社会組織に関する研究に着手したが、その途上で死去した。宗教や支配の社会学、西洋史など多方面の業績により、変動の内生的要因が多面的であることが明らかにされた。

近代化論は、第二次世界大戦後、どうすれば開発途上国を近代化できるかという実践的な課題を抱えて、欧米の近代国家をモデルにして途上国の研究を

行った。近代化論によって、世界各国の政治、経済、社会組織、宗教などと近代化との関係や、近代化の類型論に関する研究が促進された。

マルクス主義の影響を受け、近代化論の西洋中心主義に批判的なI.ウォーラステインは、開発途上国の経済的停滞などの南北問題を解明するために、世界システム論を創り出した。世界システム論は、周辺諸国の低開発は中核諸国の「搾取」によってもたらされたと論じる従属理論の視点を採り入れている。従属理論によれば、周辺国にとっては、中核国に対する従属的關係が自らの低開発を生み出していることになる。世界システム論は、最初にオランダ、次にイギリスを中心として16世紀に始まり、その後世界全体に広がって今日まで続いている経済的分業体制のシステムである「世界-経済」の内部において、中核と周辺が実質的には不平等な垂直的分業と貿易を行っていると説明する。

グローバル化論は、人と人之間、地域と地域之間、さらに都市、企業、NPOなどの機能集団の間で、国民国家を越えて行われる相互作用の緊密化と、それに起因する、ハイブリッドな（異種混濁的な）文化の生成と双方の変容に着目する。1990年代以降に盛んになったこの理論は、人、モノ、情報などが国境を越えて世界的規模で急速に移動し、移動先の人、文化、社会と頻繁に相互作用して、世界が一体化したように見える現代を捉えようとした、形成途上の変動論である。なお、本書の第11章はグローバル化論の最近の傾向に言及し、「エピローグ」は近代化論以降の社会変動論を俯瞰しているので参照されたい。

本書は特定の理論的な立場を採らずに、変化を生きながら変化を創っている人々の営み——変動に関する研究も含む——を記述し、その意味を考察している。各章は様々な局面の社会の変化を、専門の社会学や社会哲学の立場から考察したものだが、どの章を読んでも、登場する人々の言説や行動、あるいはそれを取り上げる執筆者の姿勢の根底に、社会はこのように変化してほしいという夢が感じられる。「エピローグ」は、社会の変化に対する人々——社会変動論の提唱者も含む——の夢が社会変動に与える影響力に着眼している。

本書の構成は以下の通りである。まず、「プロローグ」は坂本龍馬とA.トクヴィルの生き方と思想を通じて、人間と社会変動の関係を考えた上で、各章の概要を紹介している。

第1部「変化する社会を生きる」は人々がどのように変化を生きてきたかを描いている。各章が論じている変化の領域は、被差別経験者の差別との出会い、都市近郊の宗教施設における信仰活動、農業を通じた土地と人々の関わり、日本のステップファミリーにおける継子の育成環境、「百寿者」を介護している高齢者の意識である。

第2部「社会の変化を創り出す」では、執筆者は各自のテーマについて、人々がどのような変化を創ろうとしてきたか、あるいは創ってきたか、今後どのような変化が求められているのかを明らかにしようとしている。各章のテーマは、幕末武士の改革運動、行政広報研究にみる行政と市民の関係形成の変遷、貧困対抗運動、原発反対運動と地域メディアの関係、サイバースペースにおける個と集合の両立である。以上の10章の論考は第1部と第2部に分けられているが、「変化を生きる」と「変化を創る」のどちらにも関わっている。

第3部「新しい社会変動論の可能性」(第11章)は、グローバル化論に焦点をしぼり、「ゾーン(地帯)」における内外との相互作用によるハイブリッド化とその影響という観点から、グローバル化という社会変動を捉えようと試みている。

「エピローグ」は、社会の変化という夢が社会変動に与える影響力に着目して、社会変動と社会変動論の関係それ自体を問い直し、社会変動論の新たなあり方を提示したものである。

人々が、社会の変化を冷静に見つめ、変化に柔軟に対応し、新しい変化を構想する上で、本書が少しでも参考になれば幸いである。

2017年11月30日

北野 雄士